

館山支部だより Vol.118



房総林檎？(拙宅の庭先にて) 残念ながら4年前の台風15号で根こそぎ倒されてしまいました。

このところ“未曾有”が連発した感がありますが、今夏の長く続いた異常・危険な暑さもその一つと言えましょう。国連事務総長の“地球沸騰化時代の到来”発言は残念ながら的を得ていると思うのです。この異常な現象は自然現象に非ず、人間様もたらした“人為的な現象”にはかならないのです。地球温暖化防止が叫ばれて久しいですが、国や民族によって温度差が大きいことが足かせになっていると思うのです。“地球の沸騰化防止”は人類の生存のため焦眉の急であり、国や企業だけの問題ではなく、社会・家庭としても真剣に取り組まなければならない問題なのです。実を申すと我が家もゴミを減らすため、家の空地でささやかな焚火を続けてきたのですが、今後は止めることにしました。

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230

支部の活動概要

《8・9月の活動実績》

9.30(土) 9月支部役員会(コミセン、別法)

《10・11月の活動予定》

- 10.10(火) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 10.11(水) 隊友会への入会説明会(館山航空基地)
- 10.14(土) 館山航空基地開隊70周年記念行事
- 11月(未定) 館山航空基地殉職隊員追悼式
- 11.25(土) 11月支部役員会(コミセン)

寸言「隊友会って何をやる会？」

館山には二つの自衛隊出身者で構成されるOB団体(館空会、千葉県隊友会館山支部)がありますが、会員から「館山に二つの自衛隊OB団体が必要なの？」という質問を受けることがあります。これに対する答えは、「任意団体と公益社団法人団体との違い」というだけでは不十分で、それぞれの会が「同じような活動に終始」していたのでは、二つの自衛隊OB団体は必要がない・意味がない、ということになると思います。また「隊友会が何をやっているのかさっぱり分からない」といった苦情？を耳にすることがあります。いずれも隊友会活動に対する理解・認識という点で共通する点があると言えましょう。

隊友会の活動が新聞やテレビ報道されることは滅多にありません。これに代わるのが定期的に配付される「隊友(〇〇新聞ではないのです)」や県・支部の機関紙「〇〇だより」なのです。

これらの情報から隊友会の活動を知り、その趣旨や意義の理解に努めようとする、会員の皆さん自らの“能動的な働き”が無い限り、隊友会活動を理解することは難しいと思うのです。懸命に隊友会活動の活性化を叫んでも、空振り、一方的な努力に終わることは明々白々です。

<支部長>

<「館山支部だより」への投稿歓迎！>

支部と会員の皆さんの意思疎通の唯一の手段、また隊友会の活動状況等の理解の一助として、隔月お届けしている機関紙「館山支部だより」ですが、本音を言いますとネタを探すのに毎回悩まされているのです。単に回覧板では味気ないと考え、会員の皆さんの体験談とか主義主張、紹介したいこと、要望etc、苦情でも結構です。匿名でもペンネームでも構いませんので遠慮なく投稿をお願いします。

<支部長>

レクイエム

- 9/22 服部挙作会員ご逝去(海、享年90歳)
- 9/23 村田 猛会員御逝去(海、享年86歳)

隊友会会員として長年のご理解ご協力有難うございました。謹んで哀悼の意を表し ご冥福をお祈り致します。 <会員一同>
故服部挙作氏は、第3代館山支部長として平成10年から6年間にわたって支部の運営に当たられ、館空会との連携強化を初め、部隊諸業務への協力支援、地域社会との融和協調の推進等、公益社団法人支部としての活動に精力的に取組まれ、設立以来まだ日の浅い支部の運営基盤の確立に尽力されております。 <川村記>



<海軍省建築局出張所の建物(手前)>
現在の館山基地正門前の岸壁付近中央遠くに見えるのは鷹の島水上機班の100トン岸壁クレーン
建築局の後は横須賀施設部館山支所が引き継いでいる。
(戦後、宮城の写真マニアO氏撮影)

雑感「関東大震災100年・館山の被災の痕跡を探る」

今年関東大震災がクローズアップされ、東京はじめ被災した関東各地では大震災に絡んだ各種の催しが開かれております。特にNHKが放映した大震災被災状況のカラー版は興味深いものがありました。震災直後に撮影されたモノクロフィルム映像を最新の8Kスキャナーで高精細化し、AI技術の応用など最先端の映像技術を駆使してカラー化したものは驚嘆すべきものと言えましょう。ただこの陰には繊細かつ根気の要る“手作業”が伴っていることはあまり知られていないようです。

カラー画像(映像)は、モノクロと比べると一段と臨場感とリアリティが増し、人の顔の表情まで読み取ることができるのです。10万5千人以上の犠牲者を出した東京都の場合、約9割が地震の後に発生した火災(急速に延焼拡大)によるもので、避難者が担ぎ出した荷物や大八車で道路が埋め尽くされ避難の妨害、延焼の原因になったことが、改めて確認とされているのです。

震災後の流言飛語も怖いですね。震災100年後の今日、福島原発の処理水の海洋放出に係るいやがらせ電話やSNSは、明らかに大国政府の扇動なのです。一方で日本近海に進出して漁をする中国漁船団が大量に漁獲したサンマやイカを持ち帰ってどのように処理しているのでしょうか。何故日本近海への出漁禁止令を出さないのか不思議でならないのです。

館山地域が蒙った被害の数々

現在、館山近辺に震災の痕跡を見ることは難しいですが、房日新聞に掲載された被災状況の写真などから、ほとんど倒壊した市内の家屋や安房北条駅(館山駅)、そして駅構内にドデデ横倒しになった機関車や客車を見るにつけ大地震のすさまじさを実感させられました。幸い市街地は津波は免れたものの、富崎村(相浜、布良)では高さ9.3mに達する津波により数百人の犠牲者が出ているのです。現在の相浜漁港の見るからに頑丈そうな防波堤は震災の教訓として講じられたものでしょう。鷹の島弁財天境内には巨大な石碑「大正地震記念碑」が建てられています(写真)。市内にはほかに「復興記念碑(正木・諏訪神社)」や「震災復旧工事完成記念碑(鶴ヶ谷八幡宮)」など、震災被害を人々の記憶に永遠に残すための「伝承碑」が建てられていると言うことです。記念碑に限らず洲崎の見物海岸には地盤の隆起の痕跡「地層段丘」を見ることができます。

ごく身近な所には、海底地盤の隆起によって鷹の島と海岸が陸続きになった跡に館山航空基地があるのです。余談になりますが“陸続きになった跡を利用して海軍航空基地が造られた”というのは紛れもなく“作られた伝説”なのです。流言飛語ではないにせよ、後世に正しいこと、真実・真相を伝承する、語り継ぐことが防災にも必要だと思えます。



<鷹の島・大正地震記念碑>

9月1日付房日新聞の防災特集に、海自OBで館山市危機監理官を務める清野賢一危機監理課長の談話が載っており、要旨を紹介します。

過去に、自分たちが住む地域でこのような大きな災害があったことを知る事が先ず大事。南海トラフ地震や首都直下型地震は、30年以内に70~80%の確率で起きると言われ、津波(館山では最大11m)、地震(震度6強)も想定されている。さらに“まだ見つかっていない活断層がある”とされていると言うこと。不気味ですね。最後に、防災で強調される「自助」、「共助」、「公助」で一番大切なのは「自助・・・自分の身は自分で守る」と言うことで結ばれておりました。

<匿名、86歳、海>

館山海軍航空基地を支えた後方支援部隊・機関

昭和5年の館山航空基地・航空隊の開隊に際しては、準備(調査を含む)段階から建設工事・竣工に至るまで、さらに開隊後の部隊の運用・維持管理には幾つかの後方部隊(機関等)が関与している。知られていないことも多々あると思われるので簡単に紹介する。

建築局館山出張所

当初は海軍省建築局から直接、建築技師や技官等の関係者が派遣され、現在の隊門前の岸壁付近に建築局出張所(写真)を構え、飛行場建設の測量から庁舎、格納庫等の建築図面の作成、労働者の手配等の業務を行っていた。のちに基地の建築業務は海軍省から横須賀建築部に移譲されることになり、昭和18年8月の「海軍建築部令」の改定によって「築城施設」の建設が業務として付加され、横須賀施設部に改称された。同時に施設部要員の大幅増員とともに所掌業務も飛躍的に増大した。昭和19年初めから着手された築城施設工事も次第に本格化し、館山基地南側の戦備施設工事(地下壕や戦闘指揮所等の築城施設)は、建築資材不足に加えて建設技師や労働力不足、さらに空襲化での突貫工事という最悪の状況下で行われたが、大半が未完成のまま終戦を迎えている。

軍需部館山軍需支庫

航空ガソリンから武器弾薬、航空機部品、被服、食糧調達等々の補給業務を一手に預かる横須賀軍需部の支社的な組織。細部省略。余談であるが、昭和16年3月末現在の館山軍需支庫建築物配置図面(防衛研究所保管資料)には、赤山から県道(旧大黒屋商店前の十字路)を横切り、軍需支庫敷地を通って岸壁に至る道路がすでに記されており、赤山のガソリンタンク(「航揮油槽」、5000kl×2基)がすでに着工されていたと解釈できる。この道路は工事廃土の運搬だけでなく岸壁〜タンクを結ぶパイプラインの敷設に必要不可欠。

第2航空廠の発足と館山補給工場の開設

日米開戦直前の昭和16.10、横須賀に次いで木更津に第2航空廠(「2空廠」)が開設され各地に支所が置かれた。館山には補給工場が設けられ、上記の館山軍需支庫が所掌していた航空機修理業務を施設とともに引き継いでいる。館山基地正門前のトタン張りの大きな倉庫(現在は極洋船舶工業(株)の建物)はその一つである。「補給工場」という名称には違和感があるが、部隊の修理段階を超える軽度の修理と部品の準備を担当したことから補給工場と呼ばれたものと思料される。

終戦後米軍に提出した「軍需品等目録」には、終戦時、「艦上攻撃機、偵察機計5機」が修理機として補給工場に残されていた。